

第1回諸橋轍次記念漢字文化理解力検定 正答率と解答分析

(全体 平均点 47.0 点 正答率 47%)

【問題Ⅰ】 (正答率 43%)

[設問ごとの正答率]

問1 (読み書き) 40%、問2 (同訓異字) 67%、問3 (部首と画数) 9%、問4 (漢字の意味) 68%、問5 (熟語の意味) 77%、問6 (複数音読み) 50%、問7 (旧字体) 52%、問8 (漢字の音読み) 52%、問9 (同じ構成要素をもつ漢字) 23%、問10 (漢文の書名) 37%、問11 (漢字の意味と熟語) 65%、問12 (漢字の訓読み) 49%、問13 (故事成語と中国史) 36%、問14 (漢字擬態語) 12%

[解説]

■問1 (読み書き) 正答率が低かったのは、「頗る」「優に」「聳える」(正答は「すこぶる」「ゆうに」「そびえる」)。特に「優に」のように、「音読みの漢字1文字+かな」の形で使われることは、意外と漢字がおろそかになりがちのため、注意が必要である。

■問2 (同訓異字) 想定していた正答は「緑」と「碧」。「嬰」という答えもあった。「嬰兒(みどりご)」のようにも使うので、これも正答とした。

■問3 (部首と画数) 「幹」の部首は「干」。「幹」の左半分を答えた人が大半で、正答率は10%を切った。部首としての「干」には特定の意味はないが、部首の多くはその漢字の意味と深く関係している。ふだんから部首を意識を持って漢字に接していると、漢和辞典を引くのが早くなるだけでなく、その漢字の意味を深く掘り下げていくことができる。

■問6 (漢字の音読み) 「巖」の二つの音読みは「ゲン」「ゴン」。「ゲン」の方は正答率が高かったが、「ゴン」は難しかったようだ。「荘巖(そうごん)」を「壮巖」と書き間違えている、あと一步の解答が目立った。

■問7 (旧字体) 「経」の旧字体は「經」だが、「𦉳」の上の「一」を引き忘れている解答が目立った。旧字体は、学校では習わないし「漢字検定」にも出題されないが、漢字の歴史と伝統を知る上では重要な知識。漢和辞典を眺めるなどして、旧字体に親しむとよい。

■問10 (漢文の書名) 「歳寒くして……」の出典名は『論語』だが、『老子』『荘子』という解答が少なからず見られた。自然のイメージから老荘思想を思い浮かべたものか。本文の続く部分に出て来る「忠臣・義士」や「英雄・傑士」といった人物像は、老荘思想では評価が低いものであるところに注意。

■問14 (漢字擬態語) 松柏がそびえるようすを表す熟語は「亭亭」。かなりの方が「峨々」を選んでいて。「峨」は、部首「山へん」が付いているように、山が高くそびえるようすを表す。

【問題Ⅱ】 (正答率 53%)

[設問ごとの正答率]

問 1 (誤字訂正) 59%、問 2 (漢文から出た年齢の異称) 50%、問 3 (故事成語と人物) 45%

[解説]

■問 1 (誤字訂正) 正答率が高かったのは⑤の「下熱剤」(正答は「解熱剤」)。一方で正答率が低かったのは、①「陰も形も」(正答は「影も形も」と②「喝を入れて」(正答は「活を入れて」)。①「陰も形も」は、「陰も型も」という誤答が多かった。「影」は、「月影」や「人影」の語からわかるように、もともと光や姿の意。「陰」の「かげ」と混同しやすいので注意したい。②「喝を入れて」は、「喝を注れて」という誤答が目立った。「活を入れる」は、柔道などで気絶した人の息を吹き返らせること。転じて、弱ったものに刺激を与えて元気づけることをいう。「復活」の「活」である。一方、「喝」は禅宗で修行の際に用いる叫び声。転じて、怒鳴り声のこと。辞典を使って語源や由来を確認し、正しく使えるようにしたい。

■問 2 (漢文から出た年齢の異称) 正答は若い順に、「志学」(一五歳)・「弱冠」(男子の二〇歳)・「不惑」(四〇歳)・「還暦」(六一歳)・「古稀(古希)」(七〇歳)。

「志学」と「弱冠」を逆にした誤答が少なくなかった。年齢の異称は多くあるが、それぞれ出典や由来を知っておきたい。「喜寿」「傘寿」「卒寿」「白寿」などは日本でできたもの。なお、年齢を表す語は、いずれも満年齢ではなく、数え年による。数え年では、人は生まれた時点で一歳と数える。ある高名な作家が「還暦を過ぎるとゼロ歳に戻るので、もう一度人生を歩み直すことができる」と述べているが、これは間違い。

■問 3 (故事成語と人物) 故事成語と関係の深い人物の組み合わせとして正しくないものは、「三遷の教え」と「推敲」。「三遷の教え」は、孔子ではなく、孟子の母の教育熱心な態度をいったもの。「推敲」は、柳宗元ではなく、韓愈のエピソード。孔子と孟子、柳宗元と韓愈は、それぞれ関係が深いだけに、正確な知識を要求される問題だった。「白眼」は、気に入らない人には白い目で対したという、『晋書』に載る阮籍のエピソード。阮籍の認知度が低いのか、これを選んだ誤答が多かった。この種の問題の対策には、高校生用の資料集の類が簡便で利用しやすい。故事成語のみならず、漢文由来の知識がコンパクトにまとめてある。

【問題Ⅲ】 (正答率 33%)

[設問ごとの正答率]

問 1 (国字) 58%、問 2 (国字) 29%、問 3 (国訓) 14%

[解説]

国字は読み書きに関しては概して暗記がしやすいものだが、それらが作られた時代や文化的な背景については平均的にみて正答率が低かった。

■問1（国字） 正答は「凧」。答案では、

- ・「瓜」や「虱」など別の字と混ざってしまった字体
- ・別の字で形に共通点がある「凧」「凡」
- ・別の字で読みや意味に共通点がある「蝸」「幟」「幡」

といった解答が見られた。これらからは、「読めるけれども書けない字」であったこともうかがえる。せっかくそこまで到達しているのに、書き方があやふやな字は、分解してみて会意・形声といった成り立ちまで理解するように努めると、正確に字体を記憶できるようになるだろう。国字は、「凧」のように各時代のことば、各地の方言や地方文化とよく結びついているものが多いので、日頃から、メディアや行く先々でことばや文字の使用されている様子をよく観察し、考察してみる習慣をもつと効果的である。

■問2・3（国字・国訓） 国字・国訓は、もしも漢詩文で使用されたなら、和習（倭臭）とされかねないものでもあり、また国訓は、漢詩文を読解したり、中国製の熟語を理解したりする際に間違った解釈を生みやすいものである。字の出自や展開、用法に関しては、ふだんから漢和辞典や国語辞典など辞書で調べたり、関連する書籍を読み込んだりしておく、正確な知識が増え、文化理解の向上にもつながる。また字の音・訓となっている語は、熟語も形成することがあるので、そうした字の応用のありさまも気に留めていくと、ことばに対する理解力が向上する。

【問題Ⅳ】（正答率 52%）

[設問ごとの正答率]

問1（六書）53%、問2（読み書き・書名）55%、問3（六書）49%

[解説]

中国の言語文字に関する伝統的な学問である「小学」や「六書」にまつわる基本的な用語の意味を正確に理解し、『説文解字』『玉篇』『広韻』『康熙字典』など漢字研究史の基本的な事項を身につけておくことが望ましい。

■問1（六書） 小学校で習う六書の種類は、正答率が比較的高かった。（正答はク〈象形〉、カ〈会意〉）

■問3（六書） 「江〈形声〉」「下〈指事〉」は正答率が比較的高かった。一方で、「考〈転注〉」「長〈仮借〉」は誤答が多かった。

【問題Ⅴ】（正答率 57%）

[設問ごとの正答率]

問1（諸橋轍次記念館）55%、問2（諸橋轍次記念館）72%、問3（大漢和辞典）29%

[解説]

■問1（諸橋轍次記念館） 諸橋博士は幼少のころ、母から『西遊記』を読み聞かせてもらったことを、後年、なつかしく回想している。記念館の庭に孫悟空の像が建てられているのは、それをモチーフにしたものである。

■問3（大漢和辞典） 現在の書籍としての『大漢和辞典』は、本文12巻に、索引1巻、語彙索引1巻、補巻1巻を合わせた全15巻の構成。